

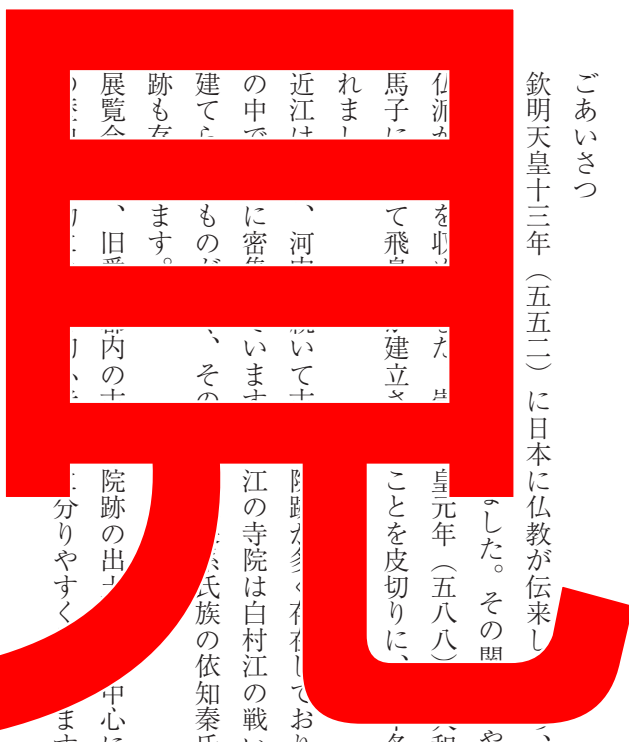
入門！古代寺院

| 旧愛知郡編 |

愛莊町立歴史文化博物館

ごあいさつ

欽明天皇十三年（五五二）に日本に仏教が伝来し



令和三年（二〇二二）四月

立歴史文化博物館

目次

概説 考古学からみた仏教伝来の諸相

帝塚山大学考古学研究所長・附属博物館長 清水昭博 …… 2

一、古代寺院の始まり …… 4

二、古代寺院の伽藍 …… 8

三、旧愛知郡の古代寺院 …… 15

掲載一覧・文献 …… 27

凡例

一、本図録は、年四月一〇日 …… 三月二

化博物館に …… 春季特別展

解説図録で …… 山本剛史が行い、

一、展覧会の …… 芸員三井義勝・西連寺匠が補佐した。

一、本文に利 …… 山本が撮影した。その他、提供を受

けたものは …… った。

一、展覧会開 …… 覧に

た。記して …… たり、展示

帝塚山大学 …… 表します。（敬称

滋賀県立 …… たい

化館 和 …… した

彦根市立 …… 石のほか、次の各位・機関の協力を得

◆ギャラリートーク ◆（春季特別展記念行事）

演題 「考古学からみた仏教伝来の諸相」

開催日 令和三年五月一六日（日）午後一時半より

講師 清水昭博氏（帝塚山大学考古学研究所長・附属博物館長）

場所 歴史文化博物館 企画展示室

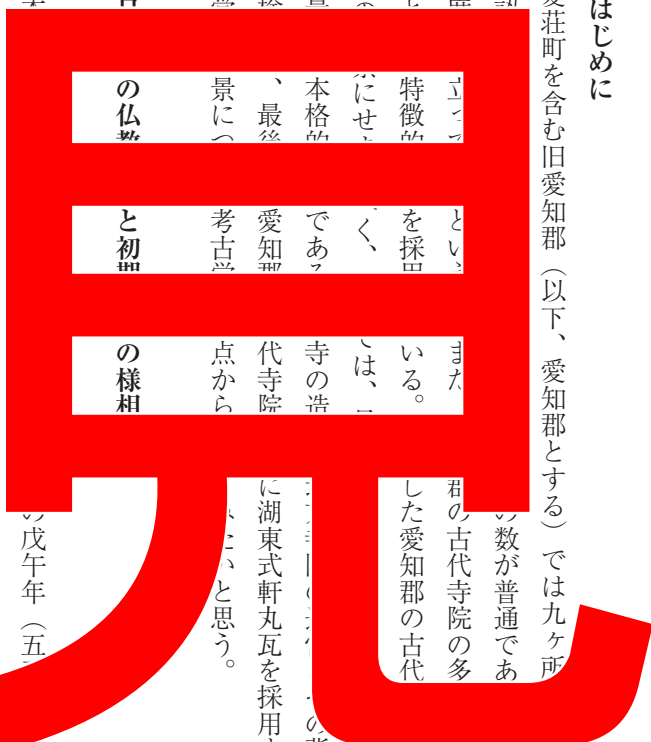
概説 考古学からみた仏教伝来の諸相

―愛知郡の古代寺院を考える―

帝塚山大学考古学研究所長・附属博物館長 清水昭博

一 はじめに

愛荘町を含む旧愛知郡（以下、愛知郡とする）では九ヶ所が確認され、密集度丸瓦造り方（本格的）といて造景に（の仏教と初期の様相）



料（『上宮聖徳法王帝説』・『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』（五五二）とする史料がある（『日本書紀』）。『上宮聖徳法王帝説』の聖明王が仏像、経教、僧等を送ったこと、それらを蘇我稲目が記す。『日本書紀』は百済の聖明王が仏像、幡蓋、経論を贈ったこと、蘇我稲目が小墾田の家に仏像を安置し、向原の家を寺としたことを記す。

六世紀中頃、朝鮮半島では新羅が飛躍的に領土を拡大していた。五四〇年代には百済とともに高句麗領に進出し、百済の古都、漢城を奪還している。しかし、五五二年に百済から漢城を奪い取り、五五四年には管山城の戦いで聖明王を戦死させている（田中俊明二〇〇八）。こうした危機的状況を背景に、

百済は日本の積極的な軍事支援を求めて、仏教を伝えたものと思われる。仏教は欽明朝に百済から伝えられた。しかし、当初は国を挙げて信仰されることにはならなかった。政権内部に仏教の受容について賛否両論があったのである。反対派は物部尾輿や中臣鎌子ら古来、朝廷の神事に関わる氏族の者たちであった。『日本書紀』によると、百済の仏像は、まず仏教賛成派である蘇我稲目の自宅家を寺に改築し、安置に反対派によって寺やかなかったのである。



敏達六年（五七七）きた。彼らを大別王の深臣が百済から弥勒石（信尼）らに安置している。言馬に仏殿をつくっている塔に納めている。しかし中臣勝海らが神罰と主用明二年（五八七）、未の変）が勃発したの馬子は戦いのなかで寺（寺）が建てられたという。翌年の崇峻元年（五八八）には百済から舍利・僧・寺工が送られることになった。善信尼らも百済へ渡海している。仏教伝来から半世紀を経て、仏教はようやく本格的に受容されることになったのである。

以上、『日本書紀』などの史料から初期仏教は蘇我氏によって、その邸宅を拠点として信仰されていたことがわかる。蘇我稲目や馬子の邸宅は畝傍山から小墾田にいたる東西約三キロメートルのエリアに営まれている（清水昭

博二〇一八)。初期仏教の舞台は天皇の宮が営まれ、政権の中心地であった初瀬や磐余ではなく、蘇我氏が本拠とする飛鳥だったのである。

ところで、初期仏教に関わる遺跡はこれまでに確認されていない。『扶桑略記』は司馬達等が仏像を安置するためにつくった仏堂を坂田原の草堂と表現する。草堂とは掘立柱構造の建物で、屋根が椽皮葺と考えられる。蘇我氏の邸宅に営まれた仏教施設も「直ぐに」同様の構造で

と。後述の飛鳥寺、長原明、聖徳太子、蘇我馬子、蘇我稲目が、飛鳥寺の邸宅に営まれた仏教施設も「直ぐに」同様の構造で

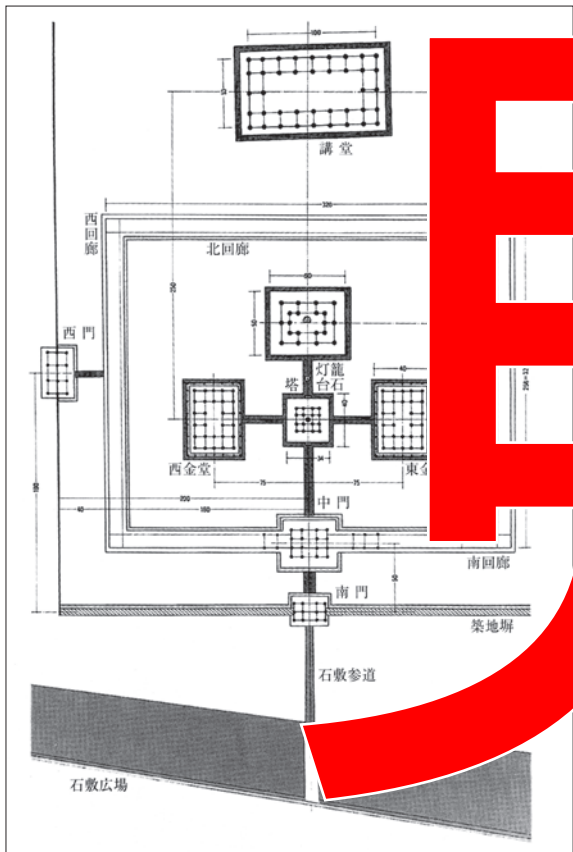


図1 飛鳥寺の七堂伽藍 (飛鳥資料館 2013)

三 飛鳥寺の造営

古代寺院を指す「七堂伽藍」という言葉がある。『国史大辞典』の七堂伽藍の解説には「寺院でもっとも重要な七つの建物。七堂。天王寺本『聖徳太子伝古今目録抄』に「種ヲ一伽藍ト云」、なおこの語は七つのである例が多い。」

古代寺院は塔、講堂をはじめ、それまでの日本にならないうちの飛鳥の地に空に日本に飛鳥寺が飛

『日本書紀』、『元鳥寺の造営に関わった飛鳥衣縫造の祖樹に山で寺に使用する廊(回廊)といった(五九三)には仏舍利を利柱の礎中に置いて利柱を建てていることから、塔の造営が開始されたことがわかる。推古四年(五九六)には馬子の子である善徳を寺司とし、高句麗僧の恵慈、百濟僧の恵聡が飛鳥寺に住み始めている。この頃には寺としての体裁は整っていたのだろう。

日本最初の本格的寺院である飛鳥寺の姿は、昭和三二年(一九五六)にはじまる発掘調査によって明らかになっている(図1、奈良国立文化財研究所一九五八・飛鳥資料館二〇一三)。現在までに、鞍作鳥が制作した銅丈六仏(飛



鳥大仏)を本尊とする現・飛鳥寺(安居院)本堂の地下から伽藍の中核となる中金堂が発見され、その周囲から東・西金堂、塔、講堂、回廊、中門、南門、西門など七堂伽藍を構成する堂塔が確認されている。また、そうした過程で古代寺院の基本要素である基壇や礎石、瓦が飛鳥寺ではじめて導入されたことも明らかになっている。

現在、全国各地で六〇〇を超える飛鳥時代の寺院跡が確認されている(菱田哲郎二〇〇七)。そうした寺院の多くも飛鳥寺と同様に、口、瓦を採用する。飛鳥時代、確実な七堂伽藍を備えた本格的寺院が各所に建立されたこと

四 院の造り
その北
一〇年
五九二
飛鳥時
つぎ
地方主
造営し
推し
二二
三二
が確
を主
国の地
が出
桑略記』。約一〇〇年のあいだに寺の数は実に十倍以上に増えた。飛鳥時代を通じて仏教が確実に普及したことを知ることができる。

しかし、飛鳥時代の寺院に関する史料はきわめて少ない。したがって、史料だけで全国各地に造営された寺院の具体像をうかがうことは難しい。そうしたなか、寺院跡から出土する瓦は各地の寺院の歴史を知る重要な資料になる。瓦の文様や技術を調べることによって、つくられた時代がわかる。瓦の年代から寺院の建立年代を導き出すことができる。建立年代が判明すれば、

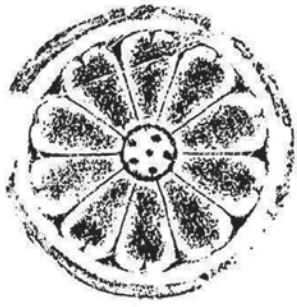
建立者や建立事情など寺院造営の具体像を知る手がかりにもなるのである。

百済の技術によってつくられた日本最初の瓦である飛鳥寺「花組」・「星組」(図2・①・②)にはじまる素弁蓮華文軒丸瓦は六世紀末〜七世紀前半に流行した(清水昭博二〇一二)。素弁蓮華文は大和、摂津、河内、山背に集中して分布する(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館一九九九)。推古朝の四六カ所の寺の名前や所在を『日本書紀』は記録している。しかし、素弁蓮華文の分布から推古朝の寺院のほとんどが大和を中心としたことと推測することができる。

百済大寺式(図2・大寺(奈良県桜井市)の分布は素弁蓮華文よ明官寺廃寺(広島県安までのひびがりのものとした時

なお、横見廃寺の瓦(木型)でつくられている。東漢氏の一族でを建造したという記録りが瓦に反映している。つながりに歴史的背景を復弁蓮華文の祖型で川原寺式(図2・④)は、六

による川原寺(奈良県明日香村)の造営を契機に創作された。川原寺式は畿内を中心に西は筑前・観世音寺(福岡県太宰府市)、東は下野・下野薬師寺(栃木県下野市)までひろがる(岡本東三二〇〇二)。その分布は百済大寺式よりもさらに広域である。美濃・飛騨地域の川原寺式の分布を大友皇子と大海人皇子(のちの天武天皇)が争った壬申の乱(天武元・六七二年)の際、大海人側に加担した豪族への論功行賞としての造寺支援と関連づける学説があ



① 飛鳥寺「花組」



百済大寺式 (吉備池廃寺)



法隆寺式 (法隆寺)



② 飛鳥寺「星組」



④ 川原寺式 (川原寺)



⑥ 小山廃寺式 (小山廃寺)

図2 飛鳥時代の瓦

る(八賀晋一九七三)。政治的動向を背景に、中央の瓦が地方に展開する場
合のあったことがわかる。

法隆寺式(図2・⑤)は天智九年(六七〇)の伽藍焼失後の法隆寺(現在の
西院伽藍、奈良県斑鳩町)の再建を契機に創作された瓦である。法隆寺式
は西日本を中心に分布する(岡本東三二〇〇二)。同時
期をみせる川原寺式と
寺の経営基盤である庄
頭清明一九七七)。皇
関わることになった法
る。

小山廃寺式(図2・⑥)は藤原朝に建てられた小山廃寺(奈良県明日香村)の
造営を契機に創作された瓦である。小山廃寺式は西日本を中心に分布する
とみられる(岡本東三二〇〇二)。同時期をみせる川原寺式と
近江、越前、若狭、伯耆の諸国に分布する(岡本東三二〇〇二)。小山廃寺の
寺名はわからない。しかし、川原寺式と同様に、川原寺式は天武天皇の
的な存在であったこと、川原寺式は天武天皇の御宇に造営された高
市大寺とする説もある(岡本東三二〇〇二)。川原寺式は天武天皇の御宇に
のタイミングと整合している(岡本東三二〇〇二)。川原寺式は天武天皇の御
武九・六八〇年)に造営された瓦である(岡本東三二〇〇二)。川原寺式は天武
あるという立地からも天皇や国家との強い関係を想定することができる。

以上、飛鳥時代の寺院跡から出土する瓦の分布から地方寺院の造営とその
背景について概観した。百済大寺式、川原寺式、法隆寺式、小山廃寺式など
七世紀中葉末にかけて、飛鳥や斑鳩といった中央で創作された瓦が各地へ
展開する状況を確認することができた。百済大寺、川原寺、法隆寺、小山廃
寺は国や天皇が関わった寺である。そうした寺々を祖型とする瓦の各地への
展開は、基本的に孝徳朝以降の国による仏教政策を反映しているものと考え



られる。

しかし、一方で各地には中央とは異なる瓦が集中して分布する様相も認められる。そのひとつが湖東式軒丸瓦の分布する近江愛知郡とその周辺地域である。最後に、考古学的視点から愛知郡に古代寺院が建立された背景を考えてみたい。

五 愛知郡の寺院造営とその背景

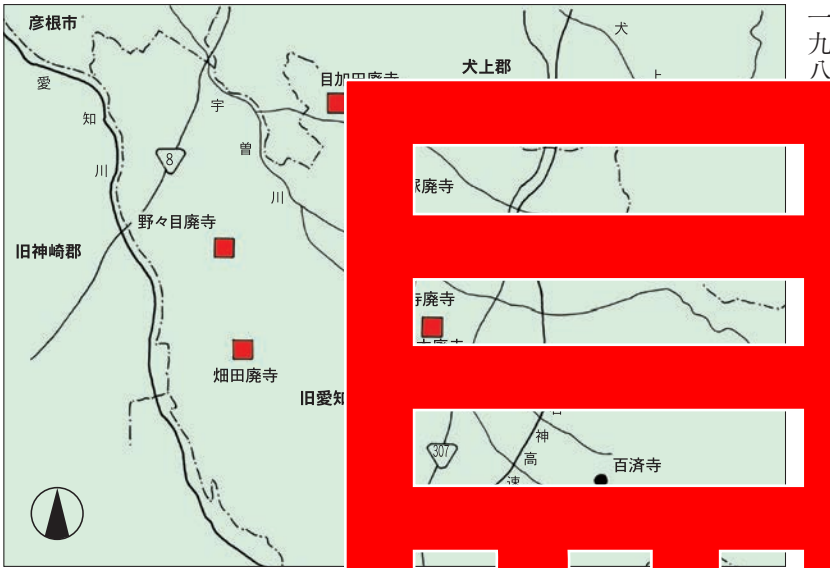


図3 愛知郡（愛知川・宇曾川中流域）の古代寺院の分布（『近江の歴史』2015）

所を超える（『近江の歴史』2015）
 つぎ、古代寺院
 された地域
 工最古の寺
 原好彦
 く建立
 る。近
 川廃寺
 や穴太
 廃寺（同）、小川廃寺（滋
 賀県東近江市）である。
 の寺院では素弁蓮
 が出土してい
 る（近江の歴史
 会編一九
 における寺院
 中頃までには
 たことがわか
 愛知郡では九カ所の古
 代寺院が確認されている。
 畑田廃寺、野々目廃寺、
 目加田廃寺、軽野塔ノ塚
 廃寺、妙園寺廃寺、小八

木廃寺、下岡部廃寺、屋中寺跡、普光寺跡である（図7）。出土瓦の年代からみて、これら愛知郡の寺院は七世紀後半に集中して建立されたことがわかる。

愛知郡の古代寺院は九ヶ寺ある。特に、六ヶ寺は愛知川と宇曾川中流域平野部に密集する（図3）。古代寺院の分布密度を全国的にみると、「二郡一寺」レベルである（吉川真司二〇一九）。愛知郡の密集度は際立って高い。なぜそれほど多くの寺院を造営する必要があるのだろうか。

その点を考えるうえで、飛鳥時代には、日本で最初の出家尼らは多くの後継者を条には、その当時、五名家者は一三八五人であに相当数の尼寺が存在、
 『日本書紀』に「尼がいた、
 年（六二四）秋九月
 六人を含めた出
 時代、全国各地
 一六）。

寺は飛鳥寺の聞える場所にあるとしたがい、飛鳥寺は造寺（のちの豊浦寺）にまた、聖徳太子が拠点、中宮寺が建立されている。地方においても僧寺『風土記』（天平五・七二明）に各々、僧と尼がいることを記している（島根県古代文化センター編二〇一四）。同じ郷内という近接した場所に僧寺と尼寺が建立されたことがわかる。

愛知郡では、妙園寺廃寺と小八木廃寺が約三〇〇メートル、屋中寺と下岡部廃寺が約四〇〇メートルと近接した立地にあり、僧寺と尼寺の関係で捉え



図4 湖東式軒丸瓦(軽野塔ノ塚廃寺)

ることができるとも思えない。また、畑田廃寺からは「僧寺」と書かれた墨書土器が出土している。(番号30) 畑田廃寺は僧寺とみられる。「僧寺」と書かれた墨書土器は尼寺の存在を暗示する。距離は約一六〇〇メートル離れるが、畑田廃寺は、軽野塔ノ塚廃寺が候補となる。

族によつて記された。二〇一四地方寺院出雲歴中愛知郡

立され残る。ての建立者。の氏。出雲歴中

地方主。国風。の名が。司(大。は格を。の氏。ん。そ

建立者。には。されて。領)を。いた。して建。衣は史

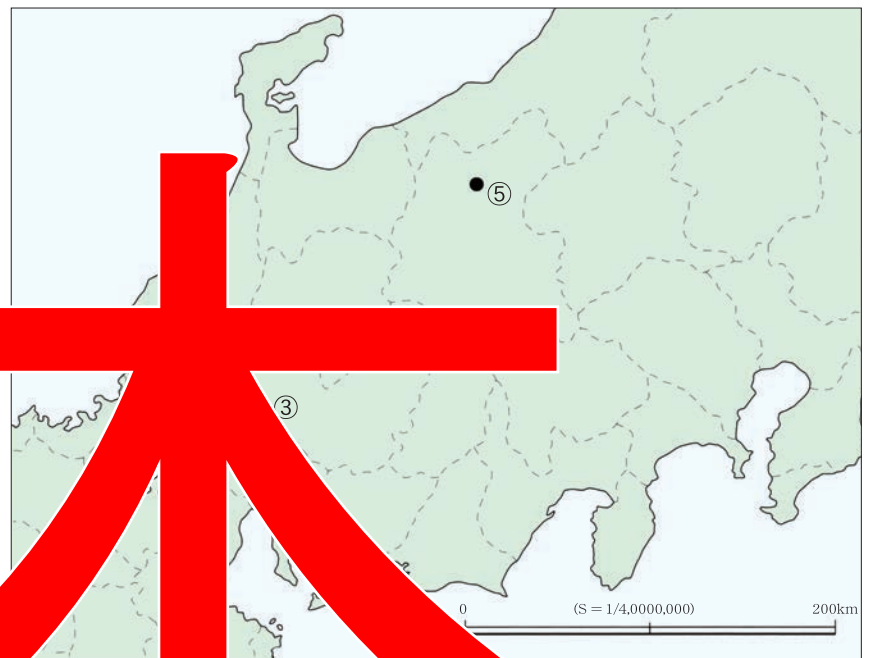
の郡・郷に建立。示している(島根県立古代

院は国や天皇、しては、先の『山

風土。一。一。編

本拠である飛鳥には、葛城氏や田中氏など蘇我氏傍系氏族も多く、飛鳥には蘇我本宗家だけでなく、傍系氏族の建立した寺院も多い(一九九七)。同様に、愛知郡においても依知秦公氏だけでなく、その傍系を含めた豪族たちによって寺院造営がおこなわれたものと考えられる。

愛知郡の中心は大国郷である。大国郷には秦姓が多い。大国郷では依知秦公氏一族が圧倒的な力を示した(大橋信弥二〇一五)。大国郷には畑田廃寺と野々目廃寺がある。畑田廃寺からは「秦」と記された習書木簡が出土して



- ③美濃・尾張 (元善町遺跡)
- ④越前 (小柏窯)
- ⑤ (元善町遺跡)

図5 湖東式軒丸瓦分布図(愛荘町立歴史文化博物館 2015)

いる(番号29)。畑田廃寺に近接する野々目廃寺は依知秦公氏の尼寺として知られている(番号29)。畑田廃寺に近接する野々目廃寺は依知秦公氏の尼寺として知られている(番号29)。

第五章でみたように、七世紀後半に建立された各地の寺院には、飛鳥や斑鳩など中央に祖型をもつ瓦が分布する。中央系の瓦は国の仏教政策と連動して各地に普及した。しかし、愛知郡には独自の瓦が展開する。愛知郡の寺院の多くは「湖東式」軒丸瓦(図4)を採用する。湖東式は近江湖東・湖北地域のほか、越前、美濃、尾張、信濃に分布する(図5)。湖東式には軽野塔



ノ塚廃寺と野々目廃寺の二系列がある（仲川靖二〇一〇）。湖東式の成立と各地への展開に軽野塔ノ塚廃寺や野々目廃寺が重要な役割を果たしたことがわかる。

湖東式同様、地方独自に分布する瓦に「寺町廃寺式」軒丸瓦がある（妹尾周三一九九一）。寺町廃寺式は備後の寺町廃寺（広島県三次市）の瓦を祖型とする。寺町廃寺式は備後北部を中心に備中や出雲に分布する（菱田哲郎二〇一九）。寺町廃寺は、『日本霊異記』が記す備後三谷郡（天智二）（天智二）三谷寺とみられる。三谷寺には百済からの渡来僧が住ん

『日』
宗教活
よい
哲郎二
水昭博
る例が
ること

〔記〕
記す。
哲郎二
九、紀
一七）
こう
さるの

〔禪師〕
廃寺式
九）
以田寺
寺町
尹例と
ばいだ

る所の
仲は禪
のの高
比と坂
式以外
湖東

多し」と禪師弘
極的な
とみて
（奈良県明日香村）の尼僧（清
の分布に僧の活動を想定でき
との関与を想定す



図6 百済大通寺出土瓦

式軒丸瓦と...の百済に
た大通寺（...川市）や
（同）の出土瓦
類似が指摘されている
二〇〇〇・滋賀県立安土
館二〇〇八）。また、高句麗の亡命
者によってもたらされたとする説も
ある（山崎信二二〇一一）。いずれ
にしても、湖東式が飛鳥など中央で
なく、朝鮮半島の影響で成立したこ

とは確かであろう。湖東式の祖型は軽野塔ノ塚廃寺、野々目廃寺にある。湖東式は愛知郡寺院の建立を契機として、朝鮮半島の瓦をモデルにつくられたものと考えられる。

愛知郡は朝鮮半島と深い関わりをもつ。『日本書紀』天智二年（六六三）条は白村江の戦いで朴市秦造田来津が戦死したとの記事を載せる。田来津は將軍であった。將軍の配下には依知秦氏をはじめとした地元愛知郡の豪族も多く参戦したことである。湖東式の成立...後三谷郡大領の先祖と...た渡来僧の関与を想定する。

六 おわりに

以上、大...院である...か、特に湖東式軒丸瓦...ら考えた。

地方寺院造営の仏教...彰し、共同体の結束強...式軒丸瓦を採用した愛...津をはじめとする白村...で、依知秦氏一族によ...

愛知郡で誕生した湖東式軒丸瓦は朝鮮半島の瓦をモデルにした。そこには半島からの渡来僧の関与が想定できる。湖東式の近江湖東・湖北地域など各地への展開も、軽野塔ノ塚廃寺や野々目廃寺など愛知郡の寺院を拠点とした渡来僧の活動の足跡とみることができるとは考えられない。

【参考文献】※発行年順

奈良国立文化財研究所一九五八『飛鳥寺発掘調査報告書』

軽部慈恩一九七二『百濟遺跡の研究』吉川弘文館

八賀晋一九七三『地方寺院の成立と歴史的背景』『考古学研究』第二〇巻一号、考古学研究会

鬼頭清明一九七七『法隆寺の庄倉と軒瓦の分布』『古代研究』一一、元興寺仏教民俗資料研究所

考古学研究室

近江の古代寺院刊行会編一九八九『近江の古代寺院』真陽社

小笠原好彦一九八九『近江古代寺院と分布』『近江の古代寺院』近江の古

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その一)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その四)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その五)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その六)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その七)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その八)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その九)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十一)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十二)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十三)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十四)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十五)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十六)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十七)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十八)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その十九)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十一)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十二)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十三)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十四)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十五)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十六)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十七)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十八)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その二十九)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三十)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三十一)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三十二)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三十三)』『古文化談叢』第二六集、九州

妹尾周三一九九一『安芸・備後の古瓦(その三十四)』『古文化談叢』第二六集、九州

大橋信弥二〇一五『秦氏の渡来と依知秦氏の形成』『エチ秦氏・渡来文化の興隆』

愛荘町立歴史文化博物館

清水昭博二〇一六『飛鳥時代の尼と尼寺・考古資料からのアプローチ』『日本古代考古学論集』

同成社

清水昭博二〇一八『蘇我氏の邸宅と瓦・畝傍の家と橿原遺跡の瓦』『帝塚山大学考古学研究所

研究報告』二〇号、帝塚山大学考古学研究所

菱田哲郎二〇一九『遺跡からみた古代寺院の機能』『古代寺院・新たに見

岩波書店

吉川真司二〇一九『古代寺院の

三舟孝之二〇二〇『古代氏族と

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社

院』同成社



川原寺跡（奈良県高市郡明日香村川原）

川原寺は、天智天皇が母の齊明天皇の菩提を弔うために創建された寺院である。川原寺の地は昔、齊明天皇が一時の宮とした川原宮であり、その跡地に建てられている。創建に関しては、史料が乏しく不明点も多いが、齊明天皇の崩御が齊明七年（六六一）であり、天智天皇が近江へ遷都したのが天智六年（六六七）のため、その間の期間に建てられたと考えられる。

堂塔は、平安時代前期に火災に遭っており、その際に焼損一括して埋めた跡が、川原寺裏山遺跡として確認されている。その一部は復興されたが、

の、往年

伽藍配

川原寺式

坊で囲ん

現在は、

金堂跡に

川原寺

である。

埴に仏

を施した

仏を表している。緑釉水波埴は蓮池を表現したものと考えられ、今須弥段の床面に敷き詰められていたと考えられる。この水波は、蓮いよく蓮が生えてきた時の様子を表していると考えられる。川原寺の緑釉埴は日本で最初期のものにあたる。埴仏も緑釉水波文埴も堂内に浄土を表現するための装飾品と考えられる。

また、粘土で作られた仏像である塑像の破片（番号13）も確認されている。大形の塑像片も出土していることから丈六仏ほどの大きさの仏像もあったと

西金堂を配す一塔
南に市
に講堂
近江の
廊の甘
初は所
は、複
文軒
寺式
西金堂を配す一塔
南に市
に講堂
近江の
廊の甘
初は所
は、複
文軒
寺式
西金堂を配す一塔
南に市
に講堂
近江の
廊の甘
初は所
は、複
文軒
寺式

考えられる。



12 緑釉水波文埴

10 複弁蓮華文軒丸瓦



13 塑像片

11 埴仏





21 複弁蓮華文軒丸瓦
(崇福寺跡出土)



17 銀製押出仏
(穴太麿寺出土)



14-1 複弁蓮華文軒丸瓦
(南滋賀麿寺出土)



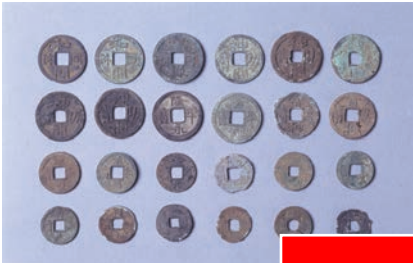
22 舍利容器 (複製)
原品は近江神宮所蔵
(崇福寺跡出土)



18 埴仏 (穴太麿寺出土)



14-2 複弁蓮華文軒丸瓦
(南滋賀麿寺出土)



23 皇朝十二銭 (崇福寺跡出土)



19 銅鈴 (穴太麿寺出土)



15 単弁蓮華文軒丸瓦
(南滋賀麿寺出土)



24 埴仏 (崇福寺跡出土)

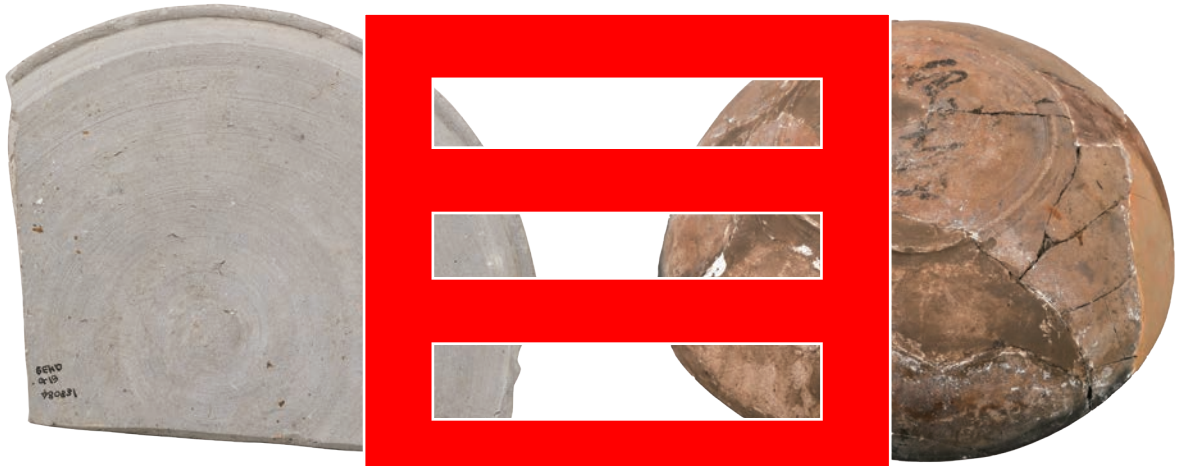


20 泥埴 (穴太麿寺出土)



16 蓮華文鬼瓦
(南滋賀麿寺出土)





33 墨書土器「大」

31 墨書土器「僧寺」



34 墨書土器「三」



30 墨書土器「寺」



35 墨書土器「祢」



32 墨書土器「樺」



目加田廃寺（愛荘町目加田小字竹ノ尻）

目加田廃寺は、目加田城から北西方向に存在すると考えられている白鳳寺院である。目加田には、「金堂」という小字が確認されており、寺院が存在していた可能性を指摘できる。発掘調査では、伽藍の遺構は確認されていない。瓦は軒丸瓦と軒平瓦、丸瓦（番号39）が出土している。軒平瓦は湖東式の単弁蓮華文軒丸瓦の破片（番号36）が出土している。軒平瓦は指圧文帯重弧文軒平瓦（番号37）と斜格子文帯重弧文軒平瓦（番号38）の二種類が出た。そのほか、（番号39）も出土している。軽土が確認されている。寺の方、備が、出土、院で、は、細、代、跡、物も、れて、の、加、時、



36 単弁蓮華文軒丸瓦



37 指圧文帯重弧文軒平瓦



38 指圧文帯斜格子重弧文軒平瓦



40-3 埴



40-4 埴



40-2 埴



40-1 埴



39 丸瓦





48-1 鋸齒文軒平瓦



48-2 鋸齒文軒平瓦



49 唐草文軒平瓦



50 磚



51 鷓尾



44- 文帶重弧 瓦



45 指压文帶簾状重弧文軒平瓦



46 指压 平瓦



47 重 平瓦



41-5 单弁蓮華文軒丸瓦



42 单弁蓮華文軒丸瓦



43 複弁蓮華文軒丸瓦



44-1 指压文帶重弧文軒平瓦



44-2 指压文帶重弧文軒平瓦



愛知川右岸の扇状部にあたる台地上に位置する白鳳寺院である。昭和四年（一九二九）に発行された『近江愛智郡志』には水田や畑地に布目瓦が散布し、用水の堰止めに用いた石に円形の穴のある二〜三尺の礎石が二個あることが記されている。ほ場整備に伴う発掘調査では、溝や掘立柱建ちなどが見つかっている。しかし、明確な寺域の範囲を示す溝や築地などはない。この廃寺には、（以下略）西方に豊満神（以下略）あり、こ

野々日廢寺から出土したと、十
号52-1の土師器の
型の出丸瓦
軒平瓦
瓦は多
もの
などが
脊梁の両側に一条もしくは二条の沈線で段型を示している。
曲がっている
である。



52-1 単弁蓮華文軒丸瓦



52-2 単弁蓮華文軒丸瓦

寺から
と、十
。その
華文軒
53-1
、重弧
軒平瓦
瓦は多
55-1

果式の
線がた
。内区に
（番号
出上
平瓦
種類が
や、

に十字
弁の数
を一つ
（番号
と
54）と
してお
ため

つけた単弁蓮華
瓦（番
）が出
。軒
を簡略・小型化したような軒
平瓦がある。指
から施文した
（番号55-1、3）
を広くした



55-3 指圧文帯重弧文軒平瓦



54-1 重弧文軒平瓦



53-1 単弁蓮華文軒丸瓦



56-1 鴟尾



54-2



56-2 鴟尾



55-2 指圧文帯重弧文軒平瓦



53-2 単弁蓮華文軒丸瓦



妙園寺廢寺（愛莊町香之庄）

小八木廢寺の北二〇〇メートル、宇曾川左岸堤防のすぐ下に所在する白鳳寺院である。小八木集落から蚊野外の集落に向かう道の雑木林が寺域に想定されている。瓦が採取された地域には、「妙園寺」、「堂尻」、「堂の後」等の小字があり、寺院があったことを窺わせる。発掘調査は、研究者『近江』

軒瓦で存在
本品
瓦（番
棒状具

現在
小八木
は、収
であ
三面に

らの
の瓦と
小谷隆
般的
に押し

現在所
が似て
が昭和
木式の
ている。

どなっ
その周
と異なり、指ではなく丸い
を見ない文様である。

東式の
は周辺
ている。

軒瓦は湖東式の単弁
鬼板（番号60）は、顔
る。顔面部のみを範で
されている。これはわ
定がある。仏のよう
め方向につけて、
三つの山形突
鼻端と口
頬・目
舌を
た獸面を表現す
二次的整形を施
期のものとの推



57 押圧文帯重弧文軒平瓦



58 単弁蓮華文軒丸瓦



59-1 指圧文帯重弧文軒平瓦



59-2 指圧文帯重弧文軒平瓦



60 獸面文鬼板

小八木廢寺（東近江市小八木町宮後・愛莊町蚊野外領）

小八木廢寺は、小八木集落の北端にある春日神社の境内に存在する白鳳寺院である。部分的な調査により南北に並ぶ二つの建物の基壇の一部が確認されている。北方には妙園寺が存在しており、類似する寺が存在しており、出土から同

軒瓦は湖東式の単弁
鬼板（番号60）は、顔
る。顔面部のみを範で
されている。これはわ
定がある。仏のよう

華文（番号58）と指
め方向につけて、
三つの山形突
鼻端と口
頬・目
舌を

た獸面を表現す
二次的整形を施
期のものとの推

出土から同

瓦（番号59）が

瓦（番号59）が



屋中寺跡・下岡部廃寺（彦根市下岡部・上岡部）

屋中寺跡は、琵琶湖岸に近い荒神山の西方の平地に所在する白鳳寺院である。下岡部廃寺とは約六〇〇メートル隔てて存在し、出土瓦も類似することから、同一寺院や「僧寺」「尼寺」的な関連を持つ別寺院と想定されている。大正一三年（一九二四）頃、字「屋中寺」付近で一段高い礎石や柱根、古瓦などが出土している。この寺院は法隆寺式（法隆寺式瓦当）の

下岡部
畑付近
いう小
軒瓦
瓦（悉
丸（悉
軒平
本の凸
る。

称「ツ
存在し
鋸歯立

不ド」
岡部廢
弁蓮華

定地と
「大村
丸瓦

墓地や、その
いる。下岡部に
する考えもある

接する
八村」と

軒丸瓦
号63）、鋸歯文縁複弁蓮華文軒
が著しく磨耗している。

している。波文は一
うな文様であ



61 鋸歯文縁単弁蓮華文軒丸瓦



62 重圈文縁単弁蓮華文軒丸瓦



66 重弧文軒平瓦



64 鋸歯文



63-1 輻線文縁複弁蓮華文軒丸瓦



67 波文軒平瓦



65 複弁蓮華文軒丸瓦



63-2 輻線文縁複弁蓮華文軒丸瓦



愛知川河口近くの右岸東部に位置する廣濱神社境内に存在する白鳳寺院である。境内には東西二・五メートル、南北二・一メートル規模の塔心礎（写真2）が現存している。心礎に穿かれた舍利孔は二段彫りであり、孔から外に向かう細溝が一本切られている。心礎表面は、現在の地表から〇・五メートルほどの高さで水平を保って置かれている。移動の痕跡がないが、原位置のままかは定かではない。白鳳時代の心礎は基本的に、原位置のままであり、原位置のままに置かれていることが多い。原位置のままに置かれている心礎は、原位置のままに置かれていることが多い。原位置のままに置かれている心礎は、原位置のままに置かれていることが多い。

周
軒瓦
見つ
安時
れる



写真2 心礎

（と重弧文軒平瓦）と重弧文軒平瓦（号69）が、平時代、平と推測さ



68-3 複弁蓮華文軒丸瓦



68-1 複弁蓮華文軒丸瓦



69 重弧文軒平瓦



68-2 複弁蓮華文軒丸瓦



掲載一覧

△…市指定文化財

番号	名称	員数	遺跡名	時代	所蔵	写真
1	素弁蓮華文軒丸瓦 (花組)	1	飛鳥寺	飛鳥時代	明日香村教育委員会	当館
2	素弁蓮華文軒丸瓦 (花組)	1			博物館	帝塚山大学附属博物館
3	素弁蓮華文軒丸瓦 (星組)	1			会	当館
4	素弁蓮華文軒丸瓦 (星組)	1		飛鳥時代	帝塚山大学附属博物館	帝塚山大学附属博物館
5	斜格子文埴	1		飛鳥時代	明日香村教育委員会	当館
6	無文埴	1		飛鳥時代	明日香村教育委員会	当館
7	単弁蓮華文軒丸瓦	1			博物館	帝塚山大学附属博物館
8	単弁蓮華文軒丸瓦	1			博物館	帝塚山大学附属博物館
9	埴仏	1		飛鳥時代	帝塚山大学附属博物館	帝塚山大学附属博物館
10	複弁蓮華文軒丸瓦	1		白鳳時代	帝塚山大学附属博物館	帝塚山大学附属博物館
11	埴仏	1	山遺跡	白鳳時代	明日香村教育委員会	当館
12	緑釉水波埴	1			会	当館
13	塑像片	2			会	当館
△ 14	複弁蓮華文軒丸瓦	2	寺	白鳳時代	近江神宮	大津市歴史博物館
△ 15	単弁蓮華文軒丸瓦	1	寺	白鳳時代	近江神宮	大津市歴史博物館
△ 16	蓮華文鬼瓦	1	寺	奈良時代	近江神宮	大津市歴史博物館
17	銀製押出仏	1			古博物館	滋賀県立安土城考古博物館
18	埴仏	1			古博物館	滋賀県立安土城考古博物館
19	風鐸	1		長門時代	滋賀県立安土城考古博物館	滋賀県立安土城考古博物館
20	泥塔	4		白鳳時代	滋賀県立安土城考古博物館	滋賀県立安土城考古博物館
21	複弁蓮華文軒丸瓦	1	崇福寺跡	白鳳時代	滋賀県立琵琶湖文化館	滋賀県立琵琶湖文化館
22	舍利容器 (複製)	1式	崇福寺跡	—	大津市歴史博物館	大津市歴史博物館
△ 23	皇朝十二銭	一括	崇福寺跡	奈良～平安	近江神宮	大津市歴史博物館
24	埴仏	1	崇福寺跡	白鳳時代	滋賀県立琵琶湖文化館	滋賀県立琵琶湖文化館
25	鋸歯文軒平瓦	1	不明	白鳳時代	当館	当館
26	単弁蓮華文軒丸瓦	1	柳屋	白鳳時代	当館	当館
27	均整唐草文軒平瓦	1		平安時代	当館	当館
28	白磁碗	1		奈良時代	当館	当館
29	木簡 (複製)	1	山廃寺	—	当館	当館
30	墨書土器 [僧寺]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
31	墨書土器 [寺]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
32	墨書土器 [櫻]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
33	墨書土器 [大]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
34	墨書土器 [三河]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
35	墨書土器 [袈]	1	畑田廃寺	平安時代	当館	当館
36	単弁蓮華文軒丸瓦	1	目加田廃寺	白鳳時代	当館	当館
37	指圧文帯重弧文軒平瓦	1	目加田廃寺	白鳳時代	当館	当館
38	指圧文帯斜格子重弧文軒平瓦	1	目加田廃寺	白鳳時代	当館	当館
39	丸瓦	1	目加田廃寺	白鳳時代	当館	当館
40	埴	4	目加田廃寺	白鳳時代	当館	当館
41	単弁蓮華文軒丸瓦	5	軽野塔ノ塚廃寺	白鳳時代	当館	当館
42	単弁蓮華文軒丸瓦	1	軽野塔ノ塚廃寺	白鳳時代	当館	当館
43	複弁蓮華文軒丸瓦	1	軽野塔ノ塚廃寺	白鳳時代	当館	当館
44	指圧文帯重弧文軒平瓦	4	軽野塔ノ塚廃寺	白鳳時代	当館	当館
45	指圧文帯簾状重弧文軒平瓦	1	軽野塔ノ塚廃寺	白鳳時代	当館	当館
46	指圧文帯斜格子重弧文軒平瓦	1			当館	当館
47	重弧文軒平瓦	1			当館	当館
48	鋸歯文軒平瓦	1			当館	当館
49	唐草文軒平瓦	1	軽野塔ノ塚廃寺		当館	当館
50	埴	1	軽野塔ノ塚廃寺		当館	当館
51	鷗尾	1	軽野塔ノ塚廃寺		当館	当館
52	単弁蓮華文軒丸瓦	2	野々目廢寺		当館	当館
53	単弁蓮華文軒丸瓦	2	野々目廢寺		当館	当館
54	重弧文軒平瓦	2	野々目廢寺		当館	当館
55	指圧文帯軒平瓦	3	野々目廢寺		当館	当館
56	鷗尾	2	野々目廢寺		当館	当館
57	押圧文帯重弧文軒平瓦	1	妙蘭寺		福命寺	滋賀県立安土城考古博物館
58	単弁蓮華文軒丸瓦	1	小		東近江市立稲枝北小学校	帝塚山大学附属博物館
59	指圧文帯重弧文軒平瓦	2			東近江市立稲枝北小学校	帝塚山大学附属博物館
60	獸面文鬼板	1			市埋蔵文化財センター	帝塚山大学附属博物館
61	鋸歯文縁単弁蓮華文軒丸瓦	1	岡部廢寺		立稲枝北小学校	当館
62	重圈文縁単弁蓮華文軒丸瓦	1	岡部廢寺		立稲枝北小学校	当館
63	幅線文縁複弁蓮華文軒丸瓦	1	下岡部廢寺・屋中寺跡		彦根市立稲枝北小学校	当館
64	鋸歯文縁複弁蓮華文軒丸瓦	1	下岡部廢寺・屋中寺跡		彦根市立稲枝北小学校	当館
65	複弁蓮華文軒丸瓦	1	下岡部廢寺・屋中寺跡		彦根市立稲枝北小学校	当館
66	重弧文軒平瓦	1	屋中寺跡		福命寺	滋賀県立安土城考古博物館
67	波文軒平瓦	1	屋中寺跡		福命寺	滋賀県立安土城考古博物館
68	複弁蓮華文軒丸瓦	3	普光寺跡		彦根市立稲枝西小学校	当館
69	重弧文軒平瓦	1	普光寺跡		彦根市立稲枝西小学校	当館



【参項文献】

- 近江愛智郡教育会一九二九『近江愛智郡志』第一卷
- 滋賀県史跡名勝天然記念物調査会一九三六『昭和四九年度滋賀県史跡名勝天然記念物概要』
- 奈良国立文化財研究所一九五八『飛鳥寺発掘調査報告書』
- 奈良国立文化財研究所一九六〇『川原寺発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会一九七六『昭和四九年度滋賀県文化財調査年報』
- 山本忠尚一九七九『舌出し獣面考』『研究論集』V 奈良国立文化財研究所
- 滋賀県教育委員会一九七九『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』五
- 滋賀県教育委員会一九七九『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』六一五
- 滋賀県教育委員会一九七九『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』六一四
- 滋賀県教育委員会一九八〇『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』七一五
- 滋賀県
- 井上光
- 小笠原
- 水野正
- 森郁夫
- 林博通
- 狩野久
- 奈良県
- 小笠原
- 岡本東
- 奈良文
- 斎藤忠
- 奈良文
- 大橋信
- 田中琢
- 愛荘町
- 木下正史二〇一六『飛鳥史跡辞典』(株)吉川弘文館
- 大津市歴史博物館二〇一七『企画展 大津の都と白鳳寺院』
- 滋賀県立安土城考古博物館二〇一八『寺と城 近江の瓦』
- 東近江市能登川博物館・埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館共催二〇一八『東近江の古代寺院とその源流—東アジアからの道—』
- 滋賀県ミュージアム活性化推進委員会二〇一九『水谷隆信収集資料図録』
- 新沢雅弘二〇一九『久米寺式軒瓦の成立と展開—藤原宮期における久米寺の性格—』『考古学研究』六六一—二考古学研究会
- 熊谷舞子・村田和弘・北村圭弘・福庭万里子二〇二〇『京都・滋賀の鴟尾』『鴟尾・鬼瓦の展開I—鴟尾—』奈良文化財研究所古代瓦研究会事務局
- 田中勝 山弘・林 九八九 (株)吉 九の成立 川弘文堂 古代寺院』近江の古 行会
- 四『わ 八『古 九『古 考古学 小笠原 〇〇〇 〇二『 究所二『 三『日 究所二『 〇四』 田中琢 『吉備池 掘調査 』(株)吉川弘文 文化の興隆』
- 山弘文堂 川弘文堂 行会
- 九八九 (株)吉 九の成立 川弘文堂 古代寺院』近江の古 行会
- 四『わ 八『古 九『古 考古学 小笠原 〇〇〇 〇二『 究所二『 三『日 究所二『 〇四』 田中琢 『吉備池 掘調査 』(株)吉川弘文 文化の興隆』
- 山弘文堂 川弘文堂 行会



本

令和三年度春季
入門！古代院
 旧愛知郡編
 編集・発行／愛荘町立歴史文化博物館
 ☎五二九—二〇二二
 滋賀県愛知郡愛荘町松尾寺八七八
 話／〇七四九(三七)四五〇〇
 刷／愛知印刷株式会社

印刷情報】
 質／本紙：ユーライト菊 76.5kg
 字／本文：モリサワ書体リュウミン Pro
 キャプション：モリサワ書体ゴシック MB101Pro R
 ノンブル：Palatino Linotype -Regular
 ク／本文：大日本インキフュージョン G-ST
 文写真／マルチベッドカラー 350dpi 4色分解